東京バッハ合唱団 月報

［第 749 号］2024 年 11 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731　Fax 専用: 03-3290-5732　郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp　http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO
Monthly Newsletter No.749
November 2024
—
5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

クリスマスの“音楽の捧げ物”、2 企画

11/16 三崎町教会、12/7 荻窪教会

2024 年も残り二月となりました。

今年は、信州演奏ツアーも久々に実現して、充実した一年を送ろうとしています。

6 月、「バッハと仲間の音楽会」

当合唱団員・松尾茂春氏の畢生の合唱作品《キラキラ星変奏曲 Version 2.0》の完全版初演と、バッハを代表するカンタータ第 6 番《とどまれ我らと》とで構成したユニークなコンサート「バッハと仲間の音楽会」を、荻窪教会(6/8)と三崎町教会(6/15)の 2 会場でご披露させていただきました。

前半は作曲者本人の指揮による《キラキラ星》。間に管弦楽団 ARS（コレギウム・ アルモニア・スペリオーレ・ジャパン）による《フルート・オーボエ・ヴァイオリンのための協奏曲》BWV 1064 をはさみ、後半は大村恵美子指揮でバッハ・カンタータ BWV 6。オルガン・田尻明葉、合唱・東京バッハ合唱団。大学院在学中または卒業したての若手ソリストたち（S 藤原優花、A 中島麻紀子、T 野中裕太、B 及川泰生）の熱演もあり、両会場とも感動に包まれての大盛況でした。

9 月、信州演奏ツアー2024

長野県の軽井沢追分教会と小布施町文化協会よりのお招きに応えての演奏ツアーに行ってきました。夏の信州旅行はコロナ禍の中断を経て、5 年ぶりに復活したもの。

9 月 22 日（日）、**軽井沢追分教会「秋の特別讃美礼拝」**で、カンタータ第 6 番《とどまれ我らと 夕闇せまり》を抜粋上演。礼拝中の讃美であったにもかかわらず、終演後に盛大な拍手をいただいて、戸惑いながら、われわれも大いに感動を受けたことでした。オルガンの田尻明葉さんは奏楽に合奏に大活躍、管弦楽はいつもの ARS の有志メンバーが同行してくださいました。

翌 23 日（月・休日）、**小布施町北斎ホール**での公演は**「バッハときどきモーツァルト、ところにより☆」**。先方のご要望もあり、ポピュラーな名曲のなかに 6 月に披露した松尾作品《キラキラ星》よりの抜粋を配置。最後に、誰でもご存じのコラール〈イエスわが喜び 心の慰め〉を、聴衆とともに歌って終了しました。

とにかく暑い、けれど楽しい夏でした。

さて、その年の瀬を迎えるにあたり、皆さんお待ちかねの《クリスマス・オラトリオ》全 6 部の抜粋版を、“音楽の捧げ物”として準備しています。いつもの 2 教会（荻窪教会と三崎町教会）が会場ですが、それぞれ趣旨を替えての演奏会になります。

11 月の三崎町は、聖書朗読、牧師のお話しと一体になって進めるもので（三崎町教会主催）、本来のバッハ音楽の在り方に立ち戻ったもの。この一年活躍した松尾曲《キラキラ星変奏曲》のクリスマス版も併せて上演します。

12 月の荻窪は、すでに恒例となった「シングイン形式」でのお届けです。聴くだけも、もちろん歓迎。

ご予定にお加えいただき、ご友人・お知り合いをお誘いの上、ぜひともご来場、ご参加くださいますよう。

・　・　・　・　・

■11 月 16 日（土）午後 2 時開演、三崎町教会

「音楽と聖書朗読による
イエス・キリストの降誕物語」

■会場地図は、チラシ裏面にあります。事務局までご請求ください。→ http://bachchor-tokyo.jp/concert_info/20241116_lecture_concert/20241116_lecture_concert.pdf

- **《クリスマス・オラトリオ》全 6 部より、抜粋**
- **松尾茂春《キラキラ星変奏曲》より、生誕部抜粋**
- **お話し：箕口雄介牧師（三崎町教会）**

管弦楽：ARS（コレギウム・アルモニア・スペリオーレ・ジャパン）

月報 2024 年 11 月号　CONTENTS

・ようこそ、バッハ合唱団の皆さま（武内英三）… p. 2
・お便り（田中克彦）/ 人生への讃歌（大村恵美子）p. 3
・連載：退屈するのはいそがしい［45］（大野博人）p. 4

オルガン：田尻明葉、合唱：東京バッハ合唱団
指揮：大村恵美子、松尾茂春（自曲）
【会場】三崎町教会（JR「水道橋」駅下車、東口より徒歩 3 分。
【入場】入場無料/申し込み不要（座席充分有り）
【主催】日本キリスト教団 三崎町教会

「クリスマスは、飼い葉おけに眠る乳飲み子の誕生が、この世界を愛と希望と喜びで満たすことを、現在も伝えています。乳飲み子が世界を救う、それは私たちの目には不思議に見えます。けれどもクリスマスは、目には見えないけれども、今も変わらず確かに私たちを喜びで満たします」と、箕口牧師のお誘いのメッセージにあります。

・　・　・　・　・

■12 月 7 日（土）午後 2 時開演、荻窪教会

クリオラ･シングイン 2024

《クリスマス･オラトリオ》、みんなで歌いましょう

■会場地図は、チラシ裏面にあります。事務局までご請求ください。→ http://bachchor-tokyo.jp/concert_info/20241207_sing_in_concert/20241207_sing_in_concert.pdf

バッハの《クリスマス･オラトリオ》を歌った覚えのある方！ 興味のある方！ ドイツ語/英語/日本語を問わず、ぶっつけ本番で参加しませんか？

客席からご参加いただきます。初心者の方もご遠慮なく、バッハの合唱を体験してみてください（歌唱部分のコピー譜 200 円）。経験者はご自分の楽譜持参でどうぞ。もっぱら鑑賞も大歓迎(臨場感抜群！のはず)

東京バッハ合唱団の団員とともに、自由に歌ってください。オケつきです。三崎町公演と同じ豪華な演奏陣で伴奏していただきます。

《クリスマス・オラトリオ》の当日の演奏曲目には、冒頭合唱曲 ①〈喜べや このよき日を〉や最終のコラール合唱 ⑭〈あだは 今しも退けらる〉はもちろん、シンフォニア ⑩で一休み。懐かしい降誕コラールの数々⑤、⑰、㊻、59……など、存分にお楽しみいただけます。後援会・団友の皆さま、OB/OG の皆さま、出番です。

【入場無料】（お申し込みは不要ですが、予めのご連絡、歓迎です：事務局）　【主催】東京バッハ合唱団

＜信州演奏ツアー＞

ようこそ、東京バッハ合唱団の皆さま

武内 英三（後援会員、現地に滞在中）

軽井沢追分教会へ (9 月 22 日)

1993 年に建設の教会。前牧師が大のバッハファンで、その音響に最も相応しいオルガンとして、日本でも数少ないオランダ･ライル社製のパイプオルガンを導入し、その響きに合わせて建てられたというのが、この礼拝堂。とくに夏場の音楽礼拝には、著名なオルガン奏者や様々な楽器のプロを招聘して、夏の音楽礼拝が開かれます。

牧師様から「今回の東京バッハ合唱団の招聘は、やっと長年の念願が叶っての実現でした」とのお話し。教会の皆様に感謝、感謝です。

厳粛な礼拝の中で讃美の歌。とくにカンタータ 6 番《とどまれ我らと 夕闇せまり》。音響効果抜群のカラマツ材の構造に囲まれて、大村恵美子先生の指揮のもと、合唱団の方々もここぞとばかりの絶唱讃歌。聴いている私たち参加者も、身体中に染み入る程の深い感動でした。

礼拝後、唐松に囲まれた芝生の中庭広場でお茶の交流会。皆さんとても明るく楽しげな表情でした。

小布施北斎ホールへ (9 月 23 日)

私たちは知人の車で、軽井沢を朝 9 時出発、菅平を経由して小布施に。連休最終日ながら、街には溢れんばかりの観光客。お目当ては、竹風堂や櫻井甘精堂の栗きんとんやモンブラン。余りの行列で近寄れず。

御当地・小布施での演奏会は 3 回目。合唱団としては、珍しくバッハ以外にモーツァルトと団員松尾茂春さんの創作合唱曲《キラキラ星変奏曲》。この曲目構成で約 300 人位の観客は存分に堪能した様子でした。

とくに松尾曲（時間の関係で 30 分程の短縮版、イエス誕生～布教～刑死～復活）は、あの民謡「キラキラ星」の名曲をベースに、分かりやすい歌詞と曲（いずれも松尾氏創作）とで編成。私たちも合唱に参加して歌っているが如くの、素晴らしさでした。

そして、圧巻のカンタータ 147 番のコラール。曲の終わりに指揮者の恵美子先生は、会場に向かって「皆様、ご一緒に歌いましょう」と呼びかけ。今年 93 歳、合唱団を率いて 63 年、という司会者の紹介を聴き、ビックリの大拍手。舞台の奏者も観客も全員一体となり、大きな声で、あの有名なコラール「イェスわが喜び 心の慰め」（大村恵美子訳）を歌い上げました。

最後に、地元主催者［小布施町文化協会会長の関悦子様：編集部］より、ぜひ来年も来て頂きたい、との御挨拶がありました。

追伸）舞台の森永さん、90 歳に近い高齢と思われますが、大きく口を開けて歌われている姿に感動致しました。

お・た・よ・り

田中 克彦（団友）

■モンゴルの景観（田中氏からの絵ハガキ表）

ノモンハン戦争85周年の国際シンポジウムを皮切りに、3 つの会議に出席してモンゴルから帰ってきたら、貴兄の文章の載った月報［9 月号、No.746］がとどいていました。

また合唱団に加わって歌いたいなあ、ちょっと忙しすぎた。でもまだ読まねばならない本などがたくさんあるし。

会議のあいまにプーチンが来た。プーチンのような 19 世紀的文明主義者を、ぼくは学生として受け持ちたかった。日本人も多くはかれのような文明主義なんだ。しかし信者としてのかれには及ばない。

人生への讃歌、世に語り継ぎ……

大村 恵美子（主宰者）

私自身のことで恐縮ですが、すでにご承知の友人方も多いと思いますけれど、私は相当の楽天家で、なんでも経験するものごとには、ああいいな、快いな、素適だな、うれしいな、楽しいな、と感じることが多い人間です。

他人方の、苦労、苦難の中にある姿を見たり聞いたりしても、ああ可哀そうに、ああ痛々しい、悲しい、と同情に浸るというよりも、大変な時期でしょうけれど、いずれ時が与えられて、じゅうぶん慰められ、一段上にと成長させていただけることがあるのでしょうから、今は分からなくても、全力を振りしぼってがんばってくださいね――と応援してしまいます。結果はすべて OK となりますように。

だから毎朝、目が覚めるときは、とても嬉しい。晴れでも雨でも、寒くても暑くても、ああまた一日が始まる、どんな日なのだろうか、とワクワクしながら起き出してしまいます。

こういう風に、すぐ起きて動けるのは健康だからなので、もちろん多くの方々が病苦の床にあったり、いつ好転するのか当てもないような重荷を負わされたりしておられることも弁えて、直接お役に立てるようなことがあるかどうか、と考えたりもしますが、この私が 93 歳をこえてもまだ体に故障を感じないのは、とんでもなく素晴らしいことだと、感謝で一杯になります。

これは、他人に話すことでもないのでしょう。私自身が高齢なので、ほとんどの知人は、既に私と出会える処に存在せず、健康でも平気で声を掛けられるような状態ではありません。私は「月報」を出すことによって他人の方々との心の交わりを戴けていますが、それが何という倖せか、と、つくづく感謝しています。

でも、みなさま、出来る間はなるべく自分の発信を他の方々に受けていただく努力も、怠らず続けてゆきましょうよ。

他の動物たちの事情はまったく分かりませんが、私たち人間は、手紙・電話その他、様々な工夫を重ねて、最短時間中に、相手の方と意思疎通が図れるようになってきています。当然のように毎日、恩恵にあずかっているこれらの他人との接触は、本当に貴重なものに違いありません。自分自身の状態同様、これらの、他人との共存は、感謝して余りあるものです。

今日は、あらたまって、このようなことを書いてしまいました。就寝中、どうしても書きたくなってしまったのです。明日からもまた、たくさんの知人・友人がたの心の友として、できる限りの人生への讃歌を、寄せたいと思いながら、駄文を終わります。

（2024/10/22）

［新刊紹介］・・・・・・・・・

クロード・ルブラン著
大野博人/大野朗子 訳
『山田洋次が見てきた日本』
（大月書店、9000 円＋税）

安曇野閑人・大野博人氏ご夫妻のお訳しになった本が出版されたことは、月報先月号（748 号）4 ページ目の隅の編集後記でご紹介しました。

今号では、非力ながら小生、この新刊のご案内を書かねば、と覚悟していましたが、ご覧の通りの大部（約 800 ページ、背幅 5 センチ！）です。呻吟しているところへ、第 4 ページの主（ぬし）からの定期便（連載第 45 回）が届き、なんと、ご本人が原著の核心を見事にご紹介くださっていた、という次第です。めでたし。

ご本人方にはメールで、＜お二人の「力訳」に乗せられて、なんの障壁もなく、あっという間に読み終えました。良く存じ上げている方の、軽々とした「力」訳のお蔭で、読んでいる文章の先にいる原著者が日本語で語っているような、しかもその声音が博人氏だったり、朗子氏だったり……、楽しかったです＞とお伝えしましたが、その通りの、自然かつ滞りのない日本語です。ご一読をお勧めします。(K)

◆上演用歌詞対訳は，当団ＨＰからご覧いただけます．
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

＜連載随想＞
退屈するのはいそがしい［45］

カミングアウト

安曇野閑人 **大野 博人**

「実は、私も寅さん好きなんです」「こう見えて寅さんファンで、何本見たかわかりません」

先日、拙訳「山田洋次が見てきた日本」の出版をあちこちにお知らせしたところ、意外なところから意外な反応をいくつかいただいた。元大物官僚、哲学・思想が専門の大学教授、フランス文学者……。知的エリートたちだ。

フランスで原著が出たときに小欄でご紹介したことがあるこの本の原著者は、私の友人でもある仏ジャーナリスト、クロード・ルブラン。山田監督の半生と作品を詳細にたどりながら、その時の日本の政治や社会、文化も見わたす一種の現代史でもある。かなりの大著で、私たち夫婦が取り組んだ邦訳も 800 ページになった。

本書は監督の全作品を取り上げているが、その主要テーマのひとつが、50 作に及ぶ「男はつらいよ」シリーズだ。日本が経済成長期へと離陸したころから、かげりを見せ始めるまで、ほぼ毎年お正月とお盆の時期にスクリーンに登場し続けた「寅さん」。バブルの狂乱と加熱した消費衝動という当時の空気とはまったく無縁の男である。その彼に会うために、毎回 100 万人以上の人たちが映画館に殺到。日本映画でもっとも愛されるキャラクターとなった。

しかし、どうも知的エリートの間では「寅さん」に惹かれてしまうのが、ちょっと恥ずかしいことのように思われていた節がある。ファンだと口にするのが少々はばかられる雰囲気。著者のクロードは、それが日本でもフランスでも山田監督作品の真の理解への大きな妨げになっていたと指摘する。「大衆から圧倒的な支持を受ける作品は、それだけで芸術ではないとみなすエリートたちのスノビズム」である。

■翻訳出版を祝って会食した浅草のどじょう屋で。山田監督をはさんで向かって右が原著者クロード、左が訳者の私たち（写真提供、説明とも筆者）

山田監督が松竹に入社したのは 1954 年。映画はヌーベルバーグの時代に入ろうとしていた。松竹に同期で入社した大島は日本での旗手と見られるようになる。

前衛的、実験的な試みが賞賛され、支持された時代だ。たとえ、多くの人にはよくわからない作品だったとしても注目を浴びた。いや、むしろ大衆に理解されない作品こそが芸術であるというような空気さえ広がっていった。その潮流に背を向けて、だれもがわかる喜劇作品などに取り組んでいた山田監督を一段下に見る映画批評がはばをきかせた。

そんな日本の批評家の声が海外にも伝わる。その結果、小津安二郎や黒澤明、大島など多くの日本の監督を高く評価するフランスでも、山田監督は軽視され、長く紹介されないままになった。

けれども近年、パリの日本文化会館で「男はつらいよ」シリーズ作品の連続上映会を開催したところ予想外の好評で、1 年の予定が 2 年あまりも続くことになった。毎回、多くのフランス人が鑑賞にやって来て、小津作品などよりずっと盛況だったという。

この上映企画にも関わったクロードは、フランスでの山田作品の軽視について、日仏映画批評界のエリート主義者たちの責任は大きいという。わかりやすい作品を、それだけで深さがないと判断する安易な批評。山田監督は長くその犠牲になっていたのだと見る。

「実は寅さんファンでした」という知的エリートたちのカミングアウトは、そんな著者にとっても翻訳した私たちにとっても想定外の喜びだ。なんだ、やっぱりみんな好きだったんだ――。

私が大学時代に哲学を専攻したことを覚えている当時の同級生は、「大野君が寅さんの本に関わるなんて想像つかない」と怪しんだ。だが、そんな見方をクロードは「寅さんも偉大な哲学者ではないか」と一刀両断する。

人々にわかりにくければわかりにくいほど、高級だといういびつな考え方は、映画にだけ特有の問題ではない。文学でも美術でも。

そして音楽でも。複雑な現代曲を楽しめないのは、自分に音楽的素養が欠けているから、バッハのカンタータを原語で理解できないのは自分の教養が足りないから……。そう思い込んで、よくわからない作品や演奏をありがたがる、わかったふりをする。

そんな堅苦しさから抜け出すためにカミングアウトしてみよう。

「実は寅さんが大好きです」

（団友・後援会員、元朝日新聞記者）

［編集後記］
2024 年 11 月。後の世の歴史書にはどんな項目が書き込まれるのでしょうか？ この数年でも、コロナ禍があり、ウクライナとパレスティナでの、いずれも非対称な戦乱が続きます。さて、選挙です。日本シリーズを制するのは、ワールドシリーズは？ 裏金か、フェイクか？ 目が離せません。安曇野の風がわたる季節になりました（K）